

再臨のキリストによる
第4福音書



太陽を着た女

—公人生の記録—

THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING

No. 4

WOMAN IN THE SUN

I

SEIDOU
正道



目次

| | |
|--------------------------------|----|
| 第1部 月に待つ女 | |
| 第4福音書 | 3 |
| 全体の目次 | 4 |
| 第1章 喜びが苦しみであること | |
| (1) いびつな初恋〈十四歳〉 | 7 |
| (2) 逃亡の記録〈一五歳〉 | 11 |
| 第2章 女性恐怖、女性蔑視 | |
| (1) 恐怖の現れとしての笑顔〈十六歳〉 | 17 |
| (2) アトラスのこと | 20 |
| (3) 少女の幻視〈十七歳〉 | 23 |
| 第3章 行き止まりからの始まり | |
| (1) 剥がされたオブラート〈十八歳〉 | 29 |
| (2) わが師の恩 | 31 |
| 第4章 妊婦とともに | |
| (1) 十八歳の平行記事 | 41 |
| (2) 愚かしさが美しいということ | 43 |
| (3) 童貞聖母への道 | 46 |
| 第5章 ウル・アトラスの執筆 | |
| (1) 引き留められた就職〈十九歳〉 | 53 |
| (2) 執筆の日々〈二十歳〉 | 56 |
| (3) アイデアとしてのシーナ | 60 |
| 第6章 アルベドの悟り | |
| (1) 聖母被昇天〈二一歳〉 | 65 |
| (2) 月に待つ女とは誰か | 69 |
| 第7章 さすらいと火の柱 | |
| (1) 母性の崇拜者 | 73 |
| (2) 創造の病〈二二歳〉 | 75 |

第1部 月に待つ女

第4福音書

再臨のキリストによる
第四福音書

太陽を着た女
——公人生の記録

第一部 月に待つ女

かくれた罪をひそかに罰して、しばしばそれを明るみに出させる、悔恨の叫びということが語られる。ああ、そのその執拗な声を聞いたことのない者がわたしたちのなかにいるだろうか。

ルソー『エミール』
今野一雄訳より

全体の目次

第1部 月に待つ女

- 第1章 喜びが苦しみであること
- 第2章 女性恐怖、女性蔑視
- 第3章 行き止まりからの始まり
- 第4章 妊婦とともに
- 第5章 ウル・アトラスの執筆
- 第6章 アルベドの悟り
- 第7章 さすらいと火の柱

第2部 太陽を着た女

- 第1章 真昼の白日
- 第2章 夕暮れの熱情
- 第3章 暁闇の淵
- 第4章 曙光射す（ルベドの悟り）
- 第5章 曇れる日

第3部 地に憩う女

- 第1章 創作の軌跡
- 第2章 夫として、父として
- 第3章 召命のとき

第1章 喜びが苦しみであること

(1) いびつな初恋〈十四歳〉

小さなコンテスト

そのとき彼女は十四歳、私にとって、中学校の同級生だった。

彼女に関しては、顔も性格も、はじめは何も知らなかった。そもそも私は、女子に対して関心が薄く、この点では、人一倍奥手だったのである。

しかし、思春期の只中にある、一般的な十四歳の男子にとっては、その関心の中心は、やはり「女の子」であるのが普通なのだろう。恋する対象としても、性の対象としても。

だから私のクラスでも、何人かの男子が集まって、「うちのクラスで、一番かわいい女子は誰だろうか」

という話をしていた。私は教室の端のほうで、それを何となく聞いていた。かなり話が盛り上がっていたことを覚えている。

そして、このコンテストの勝者として、名前が挙がったのが彼女だったのだ。

具体的な勝利者名は、シーナという。

といっても、これは名字だ。姓名における名前ではない。だが私は、敢えて彼女をシーナと呼び続ける。というのも——のちに彼女自身が教えてくれたのだが——名前のほうは、その響きがありきたりなので、あまり愛着が湧いてこないらしいのだ。

それに対して彼女は、シーナという、このどこか涼しげな感じがする名字によって呼ばれることを好んでいた。だからここでも、その意向を尊重しておこう。

謎の権利意識

さて、男子の総意として「クラスで一番かわいいのはシーナ」という事が決まった。そして何を隠そう、私がシーナに関心を持ったのは、この時が初めてだった。

しかも、そのとき私の考えは、驚くべき飛躍を遂げる。すなわち私は、この段階でいきなり「彼女を自分のものにしたい」と思ったのだ。

といっても、シーナその人がどうこうではない。そうではなく、私はただ「クラスで一番かわいいという女子と、付き合ってみよう」と思ったのである。

おそらく読者にとっては「？」だろう。説明するほうも難しいのだが、まあ、こうだ。

私は小学生の頃から風変りで、たびたびイジメに遭ってきた。そのせいで、自分の存在そのものに劣等感を抱いていた。しかし、それと同時に、自分が何か特別な存在であって、

「何であれ、最も価値のあるものは、この僕が手に入れる権利を持っている」

という奇妙な確信を持っていたのである。

そこには、子供ならではの誇大妄想があっただろう。さもないと、強い劣等感を埋めるための、補償のメカニズムだったかもしれない。

しかし今思うと、ここに、単なる妄想や補償とは言い切れない、なにか宿命的な「深層心理の働き」があったような気がするのである。

というのも、その根拠のない「最上のもの手に入れてよい」という権利意識こそが、最終的に私を「ルベド」という至高の悟りにまで、突き進ませたのかもしれないからだ。

いずれにせよ、私はシーナと付き合うことになった。

それまでには、当然のこと「二人が付き合うようになるまでのストーリー」があった。

だが、今これに触れるつもりは全くない。そのストーリーは、この福音書の主題とは、なんら関りを持っていないからだ。

だから、いっそ今は記憶の奥底に、あの「幼くて、たどたどしい恋愛物語」を深く眠らせておこうと思う。

魅力的な少女

実際に付き合うようになって分かったことだが、シーナは本当に素敵な女の子だった。優しくて聡明だった。

あまり勉強に関心を持っていないように見えたが、いざ関心を持ったら、とたんに学年トップの成績をはじき出してしまったほどだ。

けれども、そんな時でさえ彼女は、ガリベンの薄暗いオーラなど、露ほども出していなかった。

もちろん追憶の最良目はあるだろう。けれども私の中のシーナは、確かにいつもハイセンスな服を着ていて、顔つきも眩しいほど可愛らしかった。しかも、その言葉の端々には、洗練されたエスプリが込められていたのである。

とにかく私にとって、彼女が魅力的な少女であったことは間違いない。そして、その並外れた魅力によって、シーナは、私の心に異常な事態を引き起こした。すなわち私は、本気でシーナのことを好きになってしまったのである。

言うまでもないが、私はそれまで、女の子を好きになったことがなかった。

そもそも私は、つい先ごろまで小学生だった訳である。

その小学生である私が、人並みに「誰々ちゃんが好き」と言ったとしても、そんなものは、つまるところ「そういう雰囲気」とか「そういう気分的なもの」に過ぎないだろう。それは、ここにきての「シーナが好き」とは、まるで次元が異なる。

そればかりか、今の「好き」は、本格的に付き合う前のシーナに対する「好ましさ」とすら、大きく隔絶していた。今あるのは、まさしく「好きで好きでたまらない気持ち」だったのだ。

初恋の訪れ

つまりは私に、ようやく本当の初恋が訪れたのである。そういえば、「初恋だけが本当の恋愛である」

と言ったのはゲーテであるが、まさに至言である。事実、私の場合もそうだった。十四歳の私は、いま振り返っても驚嘆するほどの純粋性をもって、シーナに恋焦がれたのである。

その証拠に、私はシーナに対して、キスをすることすら出来なかった。好きという気持ちが、憧れにまで高まってしまったからだ。その結果として「自分がキスのような真似をするのは畏れ多い」と感じるようになってしまったのである。

そのため、今となっては「あんなで、男女が付き合っていたことになるのかな」と疑問に思うほどだ。客観的に眺めれば、私たちの関係は、まるで子供の遊びのような付き合いだっただろう。けれども、あのとき私とシーナの気持ちが、互いへの恋に昂っていたのは間違いない。

大いに笑ってもらって結構だが、自転車の二人乗りをしていたとき、背中に感じた胸の柔らかさと温もりとが、私にとっては、シーナとの肉体的な接触のクライマックスだった。

苦悩する哲学者

しかしである。この恋は、喜びよりも、むしろ、ずっと多くの苦しみを私に与えた。

いや、シーナが私に対し、何かひどい事をしたというのではない。彼女は終始、誠実で優しくかった。だから、そういった「よくある」類の話ではない。

そうではなく、ただ黙って受け取ればよかった喜びを、私の性情がどうしても受け容れられなかったところに、この問題の悲劇性があったのである。

私は生まれつきの哲学者だった。真理を求める求道者だった。

なにせ小学生のときの「将来の夢」で「お坊さんになりたい」と書いたぐらいだ。もちろん、そんな古い話を持ち出さなくとも、『ヘルメスの杖』の読者になれば、きっとこの私の主張を、抵抗なく受け入れてもらう事ができるだろう。

事実、私は子供のころから、真理を求めて思索を重ねていた。

哲学という言葉も、宗教という言葉も知らなかったけれども、実質的には、紛れもなく私は哲学をしていたし、また宗教的真理を求めてもいたのである。

むろん子供だから、そう大した内容の思索は出来なかつただろう。

しかし、それでも私は、確かに、真剣に「存在の根本原理」を求めていた。また、こうした思索の時間が、自分の人生にとって、最も大切な時間である、という確信を持っていた。

思索が出来ない苦しみ

そういえば、いま思い出したことがある。中学生になってからだが、親友に「人間には、真理など分からない」と言われた。けれども私は、そのとき即座に「万人にとって不可能であっても、自分になら分かるかもしれない」と心の中で思ったのである。

言われるまでもなく変わっているし、このあたりが、自分を特別だと思う矜持（プライド）の出どころであったようにも思われる。

ところがシーナという存在は、そんな私の思索を、全面的に遂行不可能にしてしまった。彼女の存在は、まったくもって私を骨抜きにしてしまった。

なにしろ私は、シーナと接するほどに、彼女以外のことを、全く考えられなくなっていったのだから。つまり頭の中が、一〇〇%シーナなのだ。まったく、何という強力な魔力であることか！

いや、それほどにも恋焦がれられる相手がいる、しかも自分は、その相手と現実につき合っているのである。これは、普通に考えたら、ものすごい幸福であったことだろう。

しかし、哲学者としての私にしてみれば「思索の余地がない」という意味で、それは最大級の不都合、最大級の苦しみに他ならなかったのである。

(2) 逃亡の記録〈一五歳〉

恋を裁断して逃げる

結局私は、この苦しみに耐えかねて、シーナから逃げた。要するに、哲学者としての自分を第一に考えて、これを優先的に守ったのである。

とはいえ、最大級の「好き」という感情から逃げるのだ。シーナへの溢れるような想いを、無理やりに断絶するのだ。とてもではないが、そう簡単に、キッパリ割り切れるものではない。

それでも！ それでも、哲学者としての私は、強靱な「シーナへの想い」を断ち切って、そこから逃れなければならなかった。それが、心の深奥から響いてきた絶対的指令だった。だから、そのために手に取るべき刃物は、とてつもなく鋭利な切れ味を必要としていた。

そして実際に私が用いた、その「切れ味抜群の刃物」とはこうだ。すなわち私は、まだシーナと付き合っている時に、他の女性と付き合うことにしたのである。

そう、女子というよりは女性。二つ年上だったからだ。私は彼女を先輩と呼んでいた。この時には、私もシーナも高校一年生になっており、先輩は三年生だった。

シーナの悲鳴

この「先輩」は、暗闇のなかで私に近づいてきて、無許可で私の唇を奪った経歴を持っている。私の「未だシーナとも重ねたことがない唇」を気軽に奪ってくれたのである。その勝手な行動に腹が立ったので、あとからお金を支払ってもらった。

けれども、このような女性が現れたことは、シーナと距離を作るためには、全くもって都合が良かった。もしかしたら私が、無意識のうちに、このような女性を、自分に引き寄せたのかもしれない。

私と先輩の仲を聞き及んだシーナのほうも、少し遅れて、別の男子と付き合いだした。

あとからシーナから聞いたところによると、彼と付き合ったのは、それによって私の気を引くためであったらしい。恋人役の男子が、悔しそうに私の胸ぐらを掴んだことがあったので、たぶん本当の話なのだろう。

しかし、そういった複雑な女性心理を理解できるほどには、当時の私は、まだ練れていなかった。逆に、シーナの行動によって、私の中では、シーナと別れるための踏ん切りがついてしまった形だ。

そうして、私は先輩を抱いた。シーナのときと違って、相手に対する畏敬の念など、ちっともなかった。だからキスの時にも、セックスの時にも、氷のように落ち着いていた。

そして、その事を、わざわざシーナに伝えて、ついに全てを終わらせた。電話ごしに聞いた、シーナの「うそ！」という言葉が、今も耳に残っている。それは決して大きな声ではなかったが、内実は悲鳴だっただろう。

苦しみから逃れたはずの自分

私は苦しみから逃れた。逃れられたはずだった。確かに、シーナから離れることが出来たのだから。これでまた落ち着いて、哲学的な思索に耽れるというものだ。

……しかし、人間の心が、そんな単純なものであろうはずがない。

なにしろ、あんなにも好きだった人を、その好きでいるままの状態で「ザンッ！」と鉦を振り下ろしたように切り離したのだ。心は捻じれて血を流す。それこそ全身の血が涸れるほどにも血を流す。

まさに、心の失血死のようだった。たぶん私の心は、このとき一度死んだのだ。そして、やがて死人のように青ざめた幽霊が、そこに立ち現れる。その青ざめた幽霊こそが、私の心の形象だった。

当然、思索が出来るような精神状態には、とても戻れない。むしろ私は、自分が哲学者であったこと自体を、忘れてしまったかのようだった。

何かから逃避するように、私は先輩と、何度も体を重ね合わせた。思春期の獣のような性欲を晴らし続けた。そうするほどに、私の心は振じくれた。自分がどんどん、嫌な奴になっていくのが分かった。

さらには、先輩から、お金や物を貰うようになっていった。その姿は、まるで性質の悪いヒモのようだった。

腐敗のモニュメント

それでも私は、表面的には、相手への優しさを保持していたようだ。

そのため先輩は、本気で私を好きになっていった。いや、とっくの昔から、先輩にとっては、私は彼女の恋人だったのだろう。

それだから先輩は、学校の帰り道で、私に尋ねてきたのだ。夕暮れが迫る頃、近くにガソリンスタンドが見えた。先輩が小さく言う。

「お前の好きな人は誰？」

戯れの要素も入っていただろうが、彼女は「先輩です」という明確な答えが欲しかったのだろう。また、私がそう言うに違いないと、先輩は心のなかで確信していたことだ

ろう。

しかし、好きな人と言われて、私は咄嗟にシーナの顔を思い浮かべてしまった。だから、その美しい映像を打ち消すためにも、ことさら強い口調で言わざるを得なかった、「好きな人なんか、いないよ！」と。

この言葉を聞いて、サッと先輩の血の気が引いた。そして私に向かって叫んだ。「お前なんか死んじまえ！」

そう言って先輩が走り去るのを、私は、ただ何となく眺めていた。後を追うこともしなかった。

だが急に、声を出して笑いたい気持ちが込み上げてきた。というのも、先輩の「死んじまえ！」という言葉が、妙にコミカルに感じられたからである。事実、私は心から笑った。「死んじまえだって。アハハ、スッゲー面白え。アハハハハ」

この高笑いこそは、モニュメントであった。私の心が、その腐敗の極みに達した際のものである。そして、この時の私は、なんと悪魔に似ていたことだろう。

第2章 女性恐怖、女性蔑視

(1) 恐怖の現れとしての笑顔〈十六歳〉

深く傷つけた女性

もう先輩とは付き合えなかった。

いや、ヨリを戻すことは不可能ではなかったし、先輩のほうも、それを望んでいたように見えた。しかし私の中で、そのために必要となる「やりとり」の面倒くさがさが先に立ってしまった。そのため、先輩の気持ちに応えるための機会を、永久に逸してしまった。

結果、もう先輩とセックスすることは出来ない。そのせいで、これまで無制限に解放しきっていた私の性欲が、その行き場を失って悶々としだした。

そんな時である。あの忌まわしい出来事が起こったのは。

突然だが、ここからは、詳しいシチュエーションを割愛して話をする。読者には、何卒これをご了承いただきたい。それは、僅かでもここに「人物特定の機縁」を残しておきたくないからだ。

これから私は、自分が深く傷つけた女性の話をする。それは彼女にとっても「人に知られたくない話」に違いないし、僅かだにも思い出したくない話であろう。

であるのに、そうした話を「公の場」である、この書で詳しく描写するのは、あまりにも酷というものだ。

それどころか、この福音書を、彼女自身がじかに読む可能性だって、決して無いとは言えないのである。その時のことを想定すれば、なおさら不用意なことは言えないだろう。

愚劣な行為

その日、彼女は私の部屋にいた。私のことは嫌いではない。ある種、お兄さんのような感情をもって、私を見ていたように思う。

しかし、こちらは性的に悶々としているところだ。とてもではないが、お兄さんなんかではられない。

しかも、この最低な男は、自分の「女性に快楽を与える技術」に、変な自信まで持っている。付き合っている時の先輩から「お前は高校生じゃない」とまで言われたからだ。私は、自分の「セクシャルな能力」に誇りすら感じていた。

それだから、
(最初は嫌がるかもしれない。でも、ことが始まりさえすれば、最終的には彼女を喜ばせることになる。つまりは、悪いことをする訳じゃないんだ)

と、そんな事を考えながら、彼女を見ていた。心の底から「女とはそういうものだ」と考えていた。それまでの先輩との関係が、私の考え方を、そのように規定してしまっていた。

そうこうしているうちにも、彼女のスカートから下着が見え隠れする。私はたまらなくなつて、彼女の上に覆いかぶさつた。

私が手首を掴んだので、彼女はほとんど動けない。無理やりキスをする。それから顔を離して、いちど彼女の表情を確かめた。

悲しい笑顔

このとき彼女が、泣いて騒ぐか、嫌がって怒るか、そのどちらでも、私は「その後」を続けられたらう。なぜなら「最初は嫌がっても、最終的には喜んでくれるはず」だからである。

だが彼女は、この時、そんな私の想定ラインのずっと外側に立った。そうして私の心を、混乱の極みへと陥れた。

すなわち、彼女は、笑っていたのである。

むろん嬉しかったのではない。そんな事はない。その反対に、彼女にとって「この時の私」という存在が、あまりにも恐ろしすぎたのだ。

彼女は思ったのだろう。下手に私の感情を掻き乱したら、この後、どんな非道いことをされるか分からない。

最悪のことを避けるためには、むしろ泣いて騒いではいけない。嫌がって怒ってはならない、と。

そのように感じたからこそ、彼女の中で、自分を守るための「女の防衛本能」が働いたのだろう。そして、最も相手を刺激しない表情としての「笑顔」が選ばれたのである。

実際私は、この悲しい笑顔によって動けなくなり、手に力が入らなくなった。彼女の本能が引き出した答えは、かくも正しかったのである。

墮落の自覚

彼女は静かに、私の手を逃れた。近くに、なぜだか風船が転がっていた。彼女は、その風船を私の顔に押し当てて「これにでもキスしてなさい」と言った。

もちろん、そんな事をするはずもない。いや、それどころか私は、この時、わずかたりも動くことが出来なかった。だから彼女は、私という檻から逃れて、容易に部屋の外へと出て行った。

私はまだ動けないままだったが、少し離れたところから、彼女が泣いている声が聞こえてきた。その泣き声を聞きながら、私は、途方もない衝撃を受けて、打ちのめされて

いた。

（俺は、ここまで堕ちていたのか！）

忘れていたことが、一気に脳裏に蘇ってきた。蘇った「昔の自分」が、今の自分を眺めた。そして、その地獄絵図に恐れおののいた。

それもそうだろう。かつては晴朗な心で、哲学的な真理を求めていた自分。それが今では、これほどまでに人を傷つけながら、そこに自分の「悪」を見出すことも、「醜」を見出すことも、出来なくなっていたのだから。

それはなぜか。いや、分かっている。不道德、わいせつ、身勝手、そういったものが、我が身の日常となっていたからだ。それらが自分にとっての「当たり前」になっていたからだ。そして人間は、自分にとっての「当たり前」を客観視することは出来ないのだ。

しかし私の場合は、蘇った昔の自分が、今の自分を客観視した。そして、その悪さ、醜さ、糞尿のような汚らわしき、吐きたくなるような卑しさに唾然となった。茫然自失となった。

卑しい、何も出来ない者

ようやく私は、ゆらゆらと歩いて行って、彼女に「もう何もしないよ」と言った。

だが違うのだ。何もしないのではない。もはや、何も出来なくなったのだ。その証拠に、これ以後のおよそ五年のあいだ、私の「女性恐怖症」の期間が生じることになる。

「自分は女性にとって存在悪のような人間なのだ。だから、もう決して女性に近づいてはならないんだ」

という、この日に生まれた確信が、私をして、そのような精神症状へと至らしめたのである。

この日の私の醜さ、卑しさ、そして汚らわしきは、私の考えを、そのように導かずにはおこななかった。

そして、それは間もなく私のなかで「女性という存在そのものに対する、漠然とした劣等感、恐怖心」へと抽象化されていった。

しかしながら、自分の劣等感や恐怖心を、ありのままに認められるほどには、このときの私は大人ではなかった。なにしろ、まだ十代なのだ。おまけに、滑稽なほどプライドも高かった。

だから私は、それらのマイナス感情を隠すようにして、自分のなかの価値観を逆転させてしまった。すなわち私は、これ以降、女性を蔑視し、女性を無価値なものだと、思い込むようになったのだ。

そう、「無価値だから、自分は女性と関わらないのだ」と。

いま思うと、じつに情けないことだと思う。しかし当時の私は、そういう心理的手法によって、ボロボロになった自分の心を、懸命に守ろうとしたのである。

(2) アトラスのこと

霊的世界との媒体

ここで読者に「アトラス」のことを、話しておかなければならない。

「アトラス」は、私にとって「霊的世界との媒体」だった。つまり、霊的世界から情報を曳いてくるための、ストローのようなものだ。

たとえば占い師は、霊界からの情報を曳き入れるために、水晶玉という媒体を使う。きっと水晶玉のなかに、霊的世界のヴィジョンが映るのだろう。

まあ、そこまで直接的ではなくとも「透明な水晶玉を見ていて、そこに霊界からのインスピレーションが、象徴的に映り込む」というのは、いかにもありそうな話である。

同じ意味で、錬金術師にとっては、その化学的な作業が、霊界との媒体（＝インスピレーションを得る機会）であった。また仏教徒にとっては、座禅が、霊界との媒体であったことだろう。

それが私の場合は「絵を描くこと」と「アトラス」だった。

少年期には、主に絵を描くことが、霊界との触媒になっていた。事実、小学生のときには、すでに、かの「アルベド侵入」のような事も起こっていたのである。

もちろん子供のことだから、そう大した絵を描いていた訳ではない。しかし、それでも当時の私は、確かに、

「これは本当に、自分が描いた絵なのだろうか」

「次に描くときには、こんな風には出来ないのではないか」

「自分にしては、これは上手に描けすぎたのではないだろうか」

といった、アルベド侵入に特有な「他人事」の感覚を味わっていた。すなわち、自分のなかに、自分のエゴ（自我）以上の存在である、アルテマ・エゴ（他我）の臨在を感じる場面が、ちよくちよくあったのである。

アトラスのこと

それが高校生になると、それまでの「絵を描くこと」から「アトラス」へと、媒体の更新が始まろうとしていた。

かかる「アトラス」は、その最終的な形態としては、小説作品となった。そして、その小説としての「アトラス」の執筆は、大体二〇歳の前後からスタートする。

しかし、その最初の着想は、十七歳のときに与えられた。すなわち、まさに女性恐怖症の只中で、創作の着想を与えられたものだったのである。

そのように、十七歳で着想を与えられた「アトラス」を、私は迷走しながら、暗中模索しながら、次第に明確な物語にしていった。およそ四年をかけて、一応の完成作品へと高めていったのである。

その四年の間に、アルベド侵入は、何度となく与えられた。そして、小説『アトラス』の一応の完結時には、ついに「アルベド自体」の悟りへと達することになる。これが二一歳の時のことだ。

そして基本的にこの「月に待つ女」は「私がアルベドに到達するまでの自叙伝」である。そうであるならば、私がここで『アトラス』に触れない訳には、絶対にいかないだろう。

しかし、そうかといって、ここで『アトラス』の全文を載せる訳にもいかない。それは全九章で構成された、まさに大長編と言ってよい小説だからである。

よって不親切と思いつつも、私は、読者に対して、次のような態度で臨むだろう。すなわち、時に、あたかも読者が『アトラス』を読了しているかのような前提でもって、本福音書の叙述を進めていく、という。

たぶん、それは本書を読むにあたって、差しさわりのない程度の話だとは思ふ。しかし、一応ここで、そのことを断っておこう。

漫画と手塚治虫

では本題に戻ろう。ふたたび私の「女性恐怖症」の時代について語りたい。

表面だけを切り取れば、そこに「女性への関心を失った、浮世離れた哲学者」があらわれる。

ある意味で私は、昔の自分に立ち戻ったのである。事実この頃の私は、本を読んでは、哲学的、神学的な思索に耽っていた。

そんな中でも、大好きな漫画は「読んだし描いたし」だった。

当時の私の「主な創作活動」は、まさにこのジャンルを中心としたものだったのだ。いつときは、本気で漫画家になろうと思っていたぐらいである。

主として読んでいたのは、手塚治虫さんの作品だった。日本を代表するこの漫画家については、とくに説明の必要性もないだろう。

何を隠そう、私は手塚治虫さんの「大ファン」だった。それは、彼の漫画以外の周辺書籍まで愛読していたことから分かる。すなわち手塚さん本人のエッセイや、関係者の追悼文集まで、私は嬉々として読み漁っていたのである。

ちなみに追悼文集というのは、私が中学三年生のときに、手塚さんが亡くなってしまったから、発生したものだった。享年六〇歳。

そして、そうした周辺書籍の中に『イースター島は世界のヘソだ』という紀行文があった。手塚さんがイースター島に赴き、そこで「世界のヘソ」と呼ばれる奇岩を見つける

という筋立てである。

(3) 少女の幻視〈十七歳〉

まぼろしを視る

そのとき初めて、この紀行文を読んだのか。それとも、以前に読んだものを再読したのか、このあたりは定かではない。

ただ、この女性恐怖症の時期に、私が『イースター島は世界のヘソだ』という紀行文を読んだこと。そして、その読書中に「幻視」を体験したことは間違いない。

幻視とは、文字通り「まぼろしを視ること」である。私はそのとき、ある少女の幻を見たのである。

それは、自分も死ぬしかない状況にあって、それでも巨人（モアイ）たちの死を見守ろうとする、少女の姿だった。

彼女は涙を流しながらも、その顔に笑みを浮かべていた。それは、とてつもなく寂しそうな笑顔だった。

そうした少女の姿がありありと、ほとんど前触れもなく、私の眼前に現れたのだった。

それは明らかに、一つの啓示だった。霊的世界からのメッセージだった。だから私は、この少女の幻視に対して、何らかのリアクションをとる義務があった。

そしてそれは、漫画家を目指していた私にとっては、この場面を用いた、ひとつの漫画作品を描くことに他ならなかった。

幻視への拒絶

だが、当時の私には、到底この少女の姿を、受け入れることが出来なかった。

その理由を一言で言えば「私が女性恐怖症だから」ということになるだろう。だが、ここでは、もう少しだけ詳しく内容を語りたい。

当時の私は、徹底して「理論的な思考形式」のなかに閉じこもっていた。そうして理論的でないものを「そんなものは下らない」と軽蔑しながら生きていた。

そして、そのように理論的でないものの最たるものとして、他ならぬ「女性の感情」というものがあつた。

だから当時の私は、徹底的に女性を蔑視していた。心の裏側に女性への恐怖を隠しながら、心の表側では、そのような感情を抱く女性を、一から十まで蔑視していたのである。私はまさに、そういう卑怯な臆病者だった。

だから少女の幻視を見たこの時も、合理性ばかりが肥大した臆病者が、必死になって叫び声を上げた。私の心中で猛然と、悩乱した叫び声が上がったのである、

「分からない！」と。

そうやって叫ぶばかりでなく、幻視した少女を、私は責め立てずにはいられなかった。ほとんど執拗なまでに、彼女を責め立てずにはいられなかった。

「自分の死を覚悟しながら、それでも巨人たちの死を見守るだって？

馬鹿な、そんな事に何の意味があるというんだ。生きていればこそ、お前は、他人のために尽くすことも出来るだろうに。

それなのに、死んで何になる？ そんなの、ただの自己満足じゃないか。そんなの、ただの自殺じゃないか。そんな馬鹿らしい死に方をするなんて、女というものは、なんて愚かしい存在なんだ！」

ユダとの相似

今になって思うのだが、私が「幻視の少女」に対して言っていることは、ほとんど「ユダ」が言っていることと一緒である。

すなわち、私の言葉は『ヨハネによる福音書』において、あの「裏切り者のユダ」が言っていることと、じつに驚くほどの同通性を見せているのである。

恥を晒すようだが、ここで読者にも検証してもらいたい。

聖書の記述によれば、それはもう、イエスの死も間ぢかい頃のことだった。ベタニアのマリアが、高価な香油をイエスの足に塗り、それを自分の髪で拭った。

このマリアの非合理的な行為に対して、ユダはきわめて合理的に反駁する。「なぜ、この〔高価な〕香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか？」

つまり「そうすれば、いま無駄に流れている香油は、大いに人々の役にたっただろうに」ということだ。

さらにユダは、マリアに対して、こうも言いたかったことだろう、「そんな事も分からないなんて、お前はなんと愚かしい女なのだ！」と。

しかし、イエスが祝福して受容するのは、合理的なユダの言葉ではなく、非合理的なマリアの行為のほうである。イエスはこのとき、ユダの言葉をさえぎって、マリアの行為を誉めるのだ。

マリアを愛でるイエス

イエスは言う。

「この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それ（香油）を

取って置いたのだから。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない」

これを、もう少し分かりやすく表現すれば、次のような言葉になるだろう。

「彼女のしたいようにさせなさい。彼女は香油を塗って、私の葬儀の準備をしてくれているのだ。彼女は今、最も価値があることをしているのである」

それを聞いて、ユダは引き下がらざるを得なかった。

『アトラス』の完結時に明らかになった事だが、幻の少女がしていたことも、本質的には、このベタニアのマリアと同じことである。それは極めて個人的な、真実味に溢れた「葬儀」であったのだ。

なのに一七歳の私には、かかる葬儀の意義が全く分からなかった。

よって当時の私は、マリアの愛も分からない、イエスの気持ちも分からない、あの憐れむべきユダにそっくりだったのである。

しかもユダは、のちに「合理的に」周りの状況を鑑みて、イエスを裏切ることになる。そして私にも「合理的に」自己内の神性を裏切り（＝無視し）、神の計画を白紙にしてしまう可能性があった。

そう思うと、何とも恐ろしい時期だったと考えざるを得ない。

東方の物語

さて、これまで見てきたように、私もまた、ユダと同じように、合理的に少女を裁いた。「女というものは、なんて愚かしい存在なんだ！」と。

ここまで言うのだから、私は明らかに、幻視した少女を拒絶したのである。換言すれば、彼女に「こっちに来るな」と言っているのである。

そして、そのように拒絶している存在をして、私が、自作の漫画の主人公になど、出来ようはずもない。

そのため高校生の私が編んだ「アトラス」は、主人公である少女が登場しない「アトラス」となった。

二一歳のときに完結をみた『アトラス』は、大まかに言えば「モアイの生起譚」である。つまり「モアイはどのように誕生したか」を説明する物語である。

そして高校生の私もまた、

「かつて生きて動いていた巨人が、石像となり、モアイと呼ばれるようになった」

という内容の物語を書いた。

形式としては絵物語であり、短文と絵が、サンドイッチ状に積み重なって、全体が構成されていた。

もっと簡明に表現すれば、絵本の画面によく似ていると言えるだろう。それを『東方の物語』という題名で、クラブ活動内で発表した。

東方とは、イースター島の「イースター」を訳したつमりの言葉である。

むろん本当は、イースターとは「キリストの復活」を意味する語である。今の私はそれを重々知っている。しかし、高校生のときの私は、そのような知識を持っていなかった

ただ。

だから当時の私は、イースターを、イースト（東）の語尾変化だと思ってしまった。それがゆえの『東方の物語』の上梓であった。

単純な勧善懲悪

それはさておき、かかる『東方の物語』は、じつに短い物語だった。

なにしろストーリー自体が単純そのものである。だから、それを長々と語る必要はなかったのだ。

「ある島に、悪い島民がいて、善良な巨人たちがいる。巨人たちは島民に殺されるが、島民たちも死んでしまう。つまり、人を呪わば穴二つということだ。

ただし巨人たちは、その姿を、石像として後世に残すことになった。それがイースター島のモアイである」

実際『東方の物語』とは、ただこれだけの話である。

一種の勧善懲悪ものであり、内容的には、実に理性的で、明快そのものだ。これだけシンプルならば、それは話が短くもなるだろう。

それに比べて、最終的な『アトラス』には、だいたい本三冊分ほどの分量がある。しかもそこでは、ストーリーと登場人物が、いとも複雑に絡み合っている。もちろん「幻視の少女」は主人公として大いに活躍する。

となれば、こちらを先に読んだ人は、それが『東方の物語』と同一の根っこを共有しているとは到底信じられないだろう。二者には、それぐらい大きな差異がある。

ぱっと見でも、片や二十ページほどの『東方の物語』。片や大長編である、完結した『アトラス』。自分でも驚いてしまうが、「幻視した少女」という要素を失ったとき、アトラスの物語は、これほどにも小さく縮こまってしまうのである。

結局のところ、当時の私には「心の複雑さと女性性」を受容するための器が、決定的に欠けていた、ということになるだろう。

もっと明快に言えば、当時の私は、恐ろしいぐらい「器が小さかった」のである。そういう事実が、『東方の物語』という作品の中で、申し分なく証拠立てられている。

第3章 行き止まりからの始まり

(1) 剥がされたオブラート 〈十八歳〉

高級感の演出

私は前章で見たような性格的欠陥を抱えたままで、専門学校に入学した。もう十八歳にもなるというのに、依然として私は、偏った合理主義者だった。そして、その合理主義の裏側に、女性蔑視と、女性恐怖症を隠し持っていた。

それはさておき「東京デザイナー学院」というのが、私が入学した専門学校の名前である。漫画やアニメーションに関わりたくて、この学校に入った形だ。

そういう学校にあって、私は成績優秀だった。表面上、人当たりもよく、容姿にもそれなりに気を使っていた。だからさしあたっては、他生徒にとって「好ましい存在」であったと言ってよいだろう。

もっとも、自然にそうなったのではない。私としては、何としても「女性を蔑視するために」そのような我が身の高級感を、演出しない訳にはいかなかったのである。

つまり「対象を下に見るために、自分のほうを高いところに置いた」ということだ。蔑視とは、つねに「下にあるものを侮ること」を意味するからである。いや、もちろん、自分を高いところに置いたと言っても、それは飽くまでも、私の自己認識上の話でしかないのだけれども。

とはいえ、そうやって女性を蔑視したのは、自分に自信がないからに他ならない。私は意識下では、ずっと変わらず、女性を恐怖していた。だから意識上では、女性蔑視によって、自己防衛をしなければならなかったのである。

つまり、一皮剥けば、すべては弱さの表現なのだ。この男、まったく、情けないと言ったらありはしない。

クラスメイトからの好意

しかし、いつも思うことなのだが、結局、他人の目には、ごく表面的なものしか見えないものらしい。それが真実だからこそ、専門学校のクラスメイトが、こんな私のことを、好きになったりするのだろう。

すでに記憶にはないが、もしかしたら、私は彼女に、何か優しい言葉でもかけたのかもしれない。彼女はいつも、私をじっと見ていた。

けれども、当時の私が、女性からの好意など、素直に受け入れられる訳もない。

むしろ、他の人に対してと同様、彼女に対しても、人当たりは良かっただろう。しか

し本心では「少しでも自分に近づこうとしている彼女」を、私は、ほとんど必死になって避けていた。だって仕方ないではないか。なにしろ女性が怖いからだ。

そして、そうした私の心理状況が、ある時、そのまま現実の状況として発露された。

それはこういうことだ。あるとき、私がいた教室に彼女が入ってきた。そのため私は、何となく居心地が悪くなって、教室を出て行った。

これだけである。これだけで彼女は、すべてを悟った。そう、そのとき彼女は、私が彼女に好意を持っていないことを確信したのである。

そして翌日には、大いに泣き腫らした目をして、彼女は学校に現れた。

露出した傷

彼女の仲間たちは、私の非道をクラス中に言いふらした。それによって、これ以後の私は、しばらく総スカンの状態に追いやられた。そんな状態のなかで、私は思った。

「べつに、自分から彼女に近づいた訳じゃない。それでも俺はこうなるのか。結局俺は、形はどうあれ、女性を傷つけずにはおかない人間なのか……」

こう呟いたときには、私の心の傷をつつんでいたオブラートは、もう跡形もなく剥ぎ取られていたと言ってよいだろう。

もともと私は「決して女性に近づいてはならない、心が淀んで卑しい男」という自己イメージを持っていた。それが言わば、私の心の奥深いところにある「精神的な傷」だった。

その傷の痛みを耐えかねて、私は傷口の表面に「女性蔑視と合理主義」という、精神的なオブラートをかぶせていた。これによって、いくぶんか心の痛みが弱まった。しかも、このような処置によって、なかば心の傷の隠蔽にも成功していたのである。

だというのに、あのクラスメイトの涙が、私の大切なオブラートを、根こそぎ剥がしてしまった。それによって精神的な傷が剥き出しになった。

かくして白日のもとに晒されたのは、十六歳のときから、何も変わっていない自分だった。問題山積で、いまや身動きも取れなくなっている自分だった。

そして何より、己を変革しないかぎり、また女性との関りをもって、その女性に対して、結局は、害悪をまき散らすしかない自分だった。

「つまり、隠しても逃げても無駄だってことだ。俺の根本のところが変わらない限り、何度だって同じようなことが起こるんだ。もう同じ失敗は繰り返したくない。でも、どうしたらいいのか、全然分からない」

そのように思わずにはいられなかった。

(2) わが師の恩

担任、鳥居塚先生

私は人生の行き詰まりに立っていた。しかし導きの手は、その時すでに、差し伸べられていたのかもしれない。

それを語るにあたって、ここにキーマン（重要人物）が登場する。名は鳥居塚誠一。専門学校時代の担任である。

担任といっても、一般的にイメージされるような担任教師ではない。なんと鳥居塚先生は、当年七二歳の御老体だったのだ。つまり立派な「おじいちゃん」だったのである。

あまつさえ、その白くて長い髭をたくわえた姿は、霞を食って生きている仙人を思わせるものがあった。

かかる鳥居塚先生は、日本のアニメーションの草創期に活躍された方だった。『安寿と厨子王丸』（1961年）、『わんわん忠臣蔵』（1963年）では、美術監督を担われている。

こうした鳥居塚先生について、他の講師が次のように言ったことがある。

「かの宮崎駿氏ですら、先生には、頭が上がらない」

宮崎駿氏とは、『風の谷のナウシカ』や『となりのトトロ』などを手掛けた、高名なジブリの映画監督である。

そんな宮崎氏が、鳥居塚先生には首を垂れるという。

この講師の言葉に、私たち生徒はしびれた。鳥居塚先生の子分として、まるで自分たちが、あの偉大な宮崎駿氏よりも、上位に立ったような気がしたからである。もちろん、その考え方自体は、子供っぽい幻想以上のものではないのだが。

ともあれ、上の話からも推測がつくように、私たち生徒は、そのほとんどが、鳥居塚先生の教え子であるのと同時に、先生のファンでもあった。実績も十分に持っておられたし、何より先生の、人格的な感化力が強かったからである。

他人の絵への署名

そのため生徒のうちの何人かが、わざわざ講師用の控室に押しかけて、鳥居塚先生のサインを貰いに行ったりした。なお、その「何人か」のうちには、私も含まれている。

そのとき私たちは、白い紙と、鳥居塚先生が描いた絵の、カラーコピーを持って行った。その二枚の紙に、サインを貰おうとしていたのである。

先生は快くサインをして下さった。ほぼ「2 (E 人数分)」だから、おそらく十枚以上は書いてくれただろう。

ところが、それからしばらくしてから、大変な問題が発覚する。

というのも、私たちが持ち込んだコピーの原本である「鳥居塚先生が描いた絵」なるものが、実は別の人の作品であることが判明したのだ。

つまり私たちは、他人の作品という土台に、貴重極まりない、先生のサインを乗せてしまったのである。

これを知って私たち生徒は、当然のこと、背中に冷や汗が流れるほどにも恐縮した。申し訳なくて、先生を直視することが出来なかった。実際、合わせる顔もないとは、こういう時につかう言葉なのだろう。

しかし、それが私たちの感情の全てではなかった。

私たちは、この一件によって、鳥居塚先生に対する尊敬の念を新たにした。他人の絵であると知りつつも、それについて何も言わず、かつ快くサインをしてくださった鳥居塚先生。その先生の大度量に、私たちは、殊更に強い感銘を受けずにはいられなかったのである。

そういえば、かの西郷隆盛も、民家に立ち寄ったとき、老婆から誤って「味噌が入っていない味噌汁」を出されたことがあった。そのとき西郷は、一言の文句も言わずに、黙って、この味噌汁を飲み干したという。

先生の態度は、そんな西郷隆盛の大らかさによく似ている。かくして私たちは、あらためて鳥居塚先生という存在に心酔した。私個人としても、学生生活の中で、このような担任教師を持たたことは、じつに大きな誇りである。

赤文字のサイン

とはいえ、先だてのサインが、さらなる問題を引き起こす。

ただし、そのサインとは、土台を取り違えた「カラーコピーの方」ではない。問題となったのは、白い紙に書いてもらった「画面に文字だけ書かれたサイン」のほうだった。

確認しておくど、私たちが、学校の控室で二枚のサインを貰ったのは、一学期の終わり頃のことだった。それから程なくして終業式となり、東京デザイナー学院は、二か月間の夏休みに入った。

ところがだ。一学期の終業式の日以来、私たち生徒が、鳥居塚先生に姿を見ることは、もう二度と無くなってしまったのである。

二学期が始まって、校舎には先生の姿はなかった。しかも、二年後の卒業までずっと。なぜか。それは、先生が亡くなられたからである。鳥居塚先生は、夏休みの期間中に入院し、そのまま肺癌のために、逝ってしまわれたのである。そういえば先生はいつも、煙管でタバコを燻らせていた。

いかに高齢とはいえ、私たち生徒たちの喪失感は大きかった。そして、その虚しさ漂う中で、クラスメイトの一人が、私に次のように言ってきた。

「君さ、あのとき赤い文字で、先生のサインを貰ったでしょう。きっと知らなかったんだろうけど、悪いジンクスがあるんだよ。つまりね、赤い文字で名前を書くと、その人は死んじゃうって言われてるんだ」

「え？」

たしかにサインを貰ったとき、私は「どうせなら目立つ色で」と思って、赤い絵の具を、鳥居塚先生に差し出した。

そして、その絵の具を使って、先生は、立派な筆文字のサインを書いてくれたのである。その現物は、今でも手元に残っている。

(でも、だからといって……それで人が死ぬなんて、ありえないだろう)

そう思いつつも、私はクラスメイトの言葉に、強いショックを受けずにはいらなかった。私はくぐもった小声で、

「なんだよ、俺が先生を殺したって言いたいのかよ」

と呟くと、自身の心中において、これまでの流れを「殺害史観」によって整理していった。

切りようがない絆

赤文字のサインを貰って夏休み → 夏休み中に恩師が入院 → 二学期になっても退院できないまま、先生が逝去……

たしかにジンクスが、その言葉のとおり成立しているように見える。

そうすると「お前が鳥居塚先生を殺したのだ」と言われても、これに対して「絶対に違う」とは言い切れなくなってきた。

むしろその「殺した」という訴えに対して、「そうかもしれない」という気持ちのほうに、次第に強くなってきた。結果、私の中で急速に「恩師殺害の罪悪感」が形づくられていった。

しかしだ。ことの良し悪しはともかくとして、「殺害者と殺害された者」という関係性ぐらい、強烈な結びつきがあるだろうか。たとえばカインは生涯、弟アベルのことを忘れられなかったに違いない。アベルを殺したあの日から、ずっと。

そう、誰だって、自分が殺した相手のことは忘れられない。あまつさえ、殺害者が、その殺害した相手を、心から慕っていたならば、なおさら。

事実、それからというもの、私の意識の中には、つねに鳥居塚先生の姿があった。つまり、何かにつけ、先生のことが思い出されるのである。

月に待つ女

そうしたおり、私たち生徒に、卒業制作に取りかかる時期が訪れた。

それは課題としては「自分でアニメーション作品を作ると仮定して、その作品に見合った背景画を描いていく」という内容だった。これを「オリジナルアニメの、イメージボードを描く課題」と言ってもよいだろう。

もちろん、既成の小説などを題材にしてもいいのだが、私はストーリー自体も、自分で考えることにした。作品の題名は『ムーン』。ジャンルとしてはSFである。

あらすじとしては、だいたい次のようなものだ。

古代人の女性が、月面上で恋人を「魂として」何万年も待っている。そして、その恋人の転生の姿である、現代宇宙飛行士が、その女性の魂に会いにゆく、と。

つまり私は、時を超えて、無意識に惹かれあう男女を描こうとしたのだった。

ちなみに、これは「アポロ計画」の実話を題材にしたストーリーである。

実在の宇宙飛行士である、ジム・アーウィンは、降り立った月面上で、周囲の景色にそぐわない、純白の小石を見つける。そして、その小石を手にとったとき「私はここにいる」という幻聴を耳にしたという。そういう世にも不思議な経験をしたというのである。

話のタネの採集場所になったのは、「アトラス」のときと同様に、手塚治虫さんのエッセイの一節だった。ただしジム・アーウィンのことは、立花隆氏や山折哲雄氏の著作などにも書かれてある。

ところで、当時の私は、まだユング心理学に触れたばかりの頃で、錬金術の知識は全く持っていなかった。それでいて『ムーン』には「月、白、霊的な女性」といった、アルベドの象徴が並んでいる。これは何とも面白いことだと思う。

救いの予兆

私は『ムーン』のストーリーを基盤にして、約十枚ほどの背景画を描いた。

そして、そこに含まれている、ある一枚の絵に携わっている時のことである。絵を描いている私の体に、まさに「霊的」と言うべき力が注がれた。換言すれば私に、アルベド侵入の「高純度のもの」が恵まれたのである。

それは、自分の手を動かしているのが、まるで自分ではないような感覚である。私よりも強い力を持った「誰か」が私を動かしている、という感じだ。

いや、むしろ高次の存在に、自分の手を貸与している感覚と言うべきか。正確に伝えるのは難しいが、とにかく、そういった「感じ」に出くわしたのである。

しかも、その絵を描くさいの画材として使っているのは「ポスターカラー」だった。それは鳥居塚先生が、生前に「これに勝る絵の具を、私はいまだ知らない」と語っていた画材だった。

少し説明しておこう。かかるポスターカラーは、アニメーションの背景画を描くのに、もっとも一般的に使われている絵の具である。

そして鳥居塚先生という人は、そのポスターカラーの使用法（用途）を、アニメーション以外のところでも、多面的に、高次に展開された方だった。

いうなれば鳥居塚先生は、まさに「ポスターカラーの大家」だったのである。

ドアが開かれる

そのため、私たち生徒の中には、ごくシンプルに「ポスターカラー＝鳥居塚先生」という図式があった。だから私は、くだんのアルベド侵入があったさい、すぐに、「亡くなった鳥居塚先生が、私の制作に、力を貸してくれたのではないか」という思いに囚われたのだった。それは私の中では、当然生じてくる想定だった。

その日私は、いつの間にか、夜通して絵を描いていた。夜の静寂から、朝日が昇るのが見えた。そして、そうやって描き上げた絵は、私個人にとって最高の傑作となった。



2023-06-05 \ (2\).png

いな、私にとってだけではない。その絵は、同級生や講師に驚嘆されるほどの作品となったのである。背景課を代表して、私の絵は、学院の卒業制作展にも出品された。

しかし、この時の体験を通して、私が出た最大のものは、決して「周りからの賞賛」などではなかった。私が出た第一のものは、私が霊的な力によって「導かれている」とか「助けられている」という実感だった。

おそらく鳥居塚先生は、そうした霊的導きの、その最初の「大きなドア」を開いてくれた恩人なのである。

第4章 妊婦とともに

(1) 十八歳の平行記事

小岩に住む姉

実を言えば、である。鳥居塚先生との一連の関わりがあった時期に、それと同じぐらい重要な出来事が、ほぼ同時進行で、他方面においても進んでいた。おそらくこの時期あたりから、私への霊的な導きが、にわかには本格化してきたのである。

それにより、私の周りでは、ほとんどわざとらしいぐらいのシチュエーションと、ストーリーによって、運命の歯車が噛み合いはじめた。

そして、この時期における、その歯車の最たるものが、姉の妊娠だった。

私には三人の姉がいるのだが、ここで語られるのは、その中の次女である。

彼女は結婚して、すでに実家を離れていた。そして当時は、千葉の小岩にある社宅に住んでいた。夫の会社の社宅（会社が用意した住宅）である。

小岩は、千葉といっても、かなり東京寄りの場所である。そのため、そこは実家がある「茨城県水戸市」からは遠いが、東京デザイナー学院がある「東京都水道橋」からは近い。

電車と徒歩を併せて、たしか一時間ぐらいで到着することが出来た。

だから私は、妊娠していた姉の様子を伺いに、よく学校帰りに小岩を訪れていた。よって家族のなかでは、私がダントツに、次女の身近にいたことになる。

しかも、姉が臨月を迎え、いよいよ実家に戻る段となると、私も同じタイミングで夏休みに入った。それは鳥居塚先生が入院した、あの夏休みである。

だから当然、私も実家に戻ることになる。となれば、妊婦である姉と、私との間には、引き離された時間が、全くなかったことになる。

つまり私は、ずっと姉と一緒にいたのである。女性恐怖症であるはずの私が、である。私は、かくも女性の傍近くに、しかも妊婦の傍近くに、ずっと寄り添っていたのだった。

いま思い出してみても、それはまことに「わざとらしいシチュエーション」であった。こんな状況は、その女性が肉親でなかったら、絶対に成立していなかっただろう。

姪が生まれる

しだいに大きくなっていく女性のお腹——それを間近で観察するのは、まさに神秘だった。

けれども、それ以上に神秘的で、ドラマチックだったのは、産婦人科に入院してからの姉の様子である。

化粧っ気もなければ洒落っ気もない「生のままの女性」の姿が、そこにはあった。

そんな生のままの女性が、いまや一心不乱になって、その「一世一代の大舞台」のステージに昇るのである。出産場面という大舞台のステージに。

陣痛に耐えつつも、ときに大声を上げ、涙を流しながら髪を振り乱す。それはまさに女性にとって最も劇的な時間だった。

私はそれを間近で見た。それは胸に迫る、圧倒的な「女性」「母性」の舞台だった。私はそれを、特等席で見せてもらったのである。

そして、ついに子供が生まれる。

最終的には帝王切開となった。なにしろ姉は、初産にして四〇〇〇グラムを超える、過大な赤ん坊を授かってしまったのである。さすがに、自然分娩では出産することが出来なかった。それでも母子ともに無事だったのだから喜ばしい。

それはのちにリカと名付けられた女児の誕生であり、私にとっては、初めての姪っ子の誕生であった。私は姉の間近で——いちおう分娩室の外側にいたとはいえ——その誕生の場面に立ち会った。

それだけに、私の女性恐怖症も、だいぶ緩和されていったように思われる。産婦人科医院の中は、女性を恐れるだの、蔑視するだのと言われている雰囲気ではなかったからだ。

もちろん、まだ、わだかまりの全てが、解消された訳ではないけれども。

そして、この助走期間を経て、さらに劇的なシーンが、私の女性恐怖症に、大きなくさびを打ち込むことになる。

(2) 愚かしさが美しいということ

孫を抱ける日

それはリカが、保育器から出されて、普通の病室に移されてからの事だった。つまり、赤ん坊が、母親の隣に寝かされている状態である。授乳なども、すでに、そこで行われていた。

そんなおり、私たちの父と母（リカにとっては祖父母）が、「明日、見舞いにいく」と言ってきた。

もともと、出産の直後にだって、父母は見舞いに来てはいた。しかし、その時には、リカは保育器の中にいたのだ。だから父母は、その孫を抱くことはおろか、指先で触れることすら出来なかった。

それが今は、リカが保育器から出されている。ということは、今ならば、誰であってもリカを抱くことが出来るのである。なにしろ初孫だ。父母としては、この時が来るのを、首を長くして待っていたに違いない。

ところが姉は、驚いたことに、次のようなことを、私に言ってきた。「お父さんに、リカを抱かせたくない」

私は「え、なんで？」と驚いてしまったが、姉は落ち着いたものだった。「だって、あのお父さんなんだよ。リカに怪我させちゃいそう。だから本当に嫌なの」

子供大事が過ぎて

私たちの父が、抱いた孫に怪我をさせる。それは確かにあり得る話だった。無骨を絵に描いたような父の手は、特別なにもしなくとも、触れるだけでリカの肌を傷つけてしまいそうだった。

実際、柔弱きわまりない新生児の肌に、無骨で石のような父の皮膚が当たるのである。そこに怪我の可能性がないはずがない。それは私も認めざるを得ない。

しかし、そうは言ってもだ。相手は、姉にとっても「実の親」にあたる人なのである。その実の親が、待望していた初孫を、抱きたがっているのである。

理性的に考えたら、より尊重すべきは「わが子に対する心配」よりも、よほど「父親の気持ちを汲んでやること」なのではあるまいか。

それに、最初に注意を促しておきさえすれば、父がリカに怪我を負わせる危険性だって、グンと下がるに違いない。だから正直、私は内心で強く思ったのである。

(姉は、子供大事が過ぎて、これぐらいの道理も分からなくなっちゃったのか。まったく、女ってのは、本当に愚かしいものだな)

これは通例の、実に私らしい発想だと言える。まさに女性侮蔑者の本領発揮と申せよう。

絶対性をもった愛情

しかしこの時、私の中で、信じられないような「心の変化」が起こった。

すなわち、侮蔑の対象である「女性の愚かしさ」に対して——まことに不思議なことながら——なぜか「やすらぎ」と「敬い」の気持ちまでが、同時に湧き上がってきたのである。

これは一体どうしたことなのか。

当時は言葉に出来なかったが、今ならばそれを、ある程度まで説明することが出来るような気がする。

そうしてみると、このときの姉は、ただただ我が子のことだけを想っていた。

そう、彼女は子供を、決して「思考の天秤」に乗せたりしない。何かと比べたりしない。つまり「あれも正しいが、これも正しい」という相対性の土俵に乗せたりしない。

要するに姉は、理性的な判断など、ハナから、するつもりがないのである。だから理性的に見れば、姉の考えは、当然のごとく浅慮で愚かしい。

しかし逆に言えば、姉の中では、そこまでの覚悟が、当たり前のように出来上がっているのだ。

それによって彼女の「子への想い」は、実の父親の愛情(孫への想い)すら、撥ねつけるほどの「絶対性」を獲得することになる。

事実、子供の安寧のためならば、姉は、それを邪魔だてする全てのものを、一つ残らず撥ねつけてしまうだろう。しかも、そのことを一切悔いないだろう。ゆえにそれは、まさに「絶対性を持った、子供への愛情」であることだろう。

愚かしさ=美しさ

その絶対的な愛情を見て、私の心はたじろぎ、と同時に、温かく揺れ動いた。

(絶対性というものが、母親や母性というものの、普遍的な本性なのだとしたら……そうだとすれば、その恩恵に浴したのとは、決してリカだけではないことになる。赤ん坊のころの自分もまた、母親によって、こんな風に絶対的に守られ、絶対的に愛されていたはずなんだ)

そう思うと、その「絶対的に、母親によって守られていた過去」が、今の自分に対してさえ、深い安らぎを与えてくれた。

そして、そのような安らぎを与えてくれた「母性」に対して、私は、自分の心から畏敬の念が湧き上がるのを、どうしても止められなくなった。

そして私は思ったのである。

(俺は、なんと馬鹿なんだろう。馬鹿な俺は、なんという偉大なものを侮蔑した気でいたんだろう。母性は女性の持ち物であるのに、その女性を、俺はずっと蔑視してきたのだ。こんなにも偉大な女性を。こんなにも畏敬すべき女性を！)

この時に至って、私の女性蔑視の姿勢は、完全に、完膚なきまでに崩れ去った。

偉大なる母性を前にしたとき、私という存在は、限りなく矮小なものだった。そして、小さなものが、大きなものを蔑視できるはずもなかった。

だが、それだけではない。母性が持つある種の愚かしさ(=理性的でないこと)は、その絶対性のゆえに、私にとって一転「崇高なもの」「美しいもの」となった。

そして何よりも、女性の母性は私にとって「受け入れるに値するもの」として、認識されるようになったのである。

(3) 童貞聖母への道

妊娠出産を奪われた姉

ただし私には、その母性を「女性の体の生理に由来するもの」とすることに、大きな抵抗があった。

つまり「実際の妊娠や出産だけが、母性というものを形作る」とは、どうしても思いたくなかったのである。

なぜなら今回、出産を果たした姉（次女）が、「子供を産まないと、女は、本当の優しさを身に付けられないものなんだって」

などと言ってきたからだ。いや、たしかにその言葉には、相当な「真実性の重み」が備わっていた。そのことについては私も認めよう。

しかし、ごく身近なところを見回してみれば、私たちの長姉こそは、妊娠や出産の経験を「禁じられている」女性の一人だったのではないか。

まことにそうなのであって、実をいえば、我らが長姉は、数年前に乳がんの手術を受けていた。そのさい彼女は、長期にわたって、抗がん剤や、諸々の薬品を投与されることになった。

またその間、体重もかなり減少した。そうしてこの姉は、いまや「妊娠や出産に耐えられない体」になっていたのである。

ぬいぐるみに乳を

またこの長姉は、次のようなエピソードをも、私に教えてくれた。

それは手術の前日のことである。その日の姉は、深い悲しみに押し潰されそうになっていた。まもなく彼女は「彼女にとって、とても大切なもの」を失おうとしていたからである。

現代ならば乳癌にかかっても、その癌の患部だけを摘出できる手術法がある。

しかし、当時の医療の水準では、しこり（癌組織）があるほうの乳房は、そっくり丸ごと摘出するしか手術法がなかった。

ということは、明日の終わり頃には、長姉の体には、片方の乳房しか残っていないことになるのである。そう、彼女を悲しませているのは、この「乳房の喪失」という予定に他ならなかった。

そのため、手術が行われるその前夜、姉は、クマのぬいぐるみの口を、自分の乳首に当てがったという。翌日には無くなってしまおうの乳首に。病室の暗がりの中で、泣きながら、そのようにしたのだと言っていた。

それは、きっと一つの儀式だったのだ。そうやって姉は、自分の乳房、自分の体の「母なるものの象徴」と何とか決別したのである。

それにしても、まだ二十代であった姉にとって、それはどれほど辛い儀式だったことだろう。

そのとき片方の乳房を失った姉は、同時期に、妊娠や出産という「母なる営為」に参入する権利まで失っていた。

実際に出産などしたら、その分娩中に、彼女は命を落としてしまうかもしれない。それが現在の長姉が置かれている医学的な現実だった。

肉身を離れた母性を求めて

そんな姉を持っているのにも関わらず、次女は言ったのだ、「子供を産まないと、女は、本当の優しさを身に付けられないものなんだって」などと。「じゃあ、子供を産めない長姉には、本当の優しさが一生身に付かないというのか！ そんな理不尽なことがあっていいのか！」

そう思うと私には、安易に、妊婦や母親を賛美する気には、到底なれなかった。

むろん、次女の妊娠出産によって、私が、母性の偉大さに圧倒されたのは事実である。その事実を否定する気は毛頭ない。

しかし、その母性を、肉体的なものだけに還元することは、私には絶対に出来なかった。むしろ、長姉のことを思えば、それは「してはいけないこと」だったのだ。

このため私は、自分が受け入れるべきものとして「肉身を離れた母性」を希求するようになった。

もっとも、そんなものがあるのか分からないし、それがどんなものであるかも分からない。したがって、それを掴み取ることは、なおのこと困難なことになりそうだった。

しかし、その大きな困難は、飽くまでも人間にとっての困難だった。それは神にとっての困難ではなかった。

だから、私にとっても困難ではなかった。私はどうやら、すでに神による「運命の導き」のもとにあったからだ。

つまり私には、「肉身を離れた母性」を掴むまでの道程が、運命によって、しっかりと用意されていたのだ。そして私は、もうすでに、その道程の端緒を歩いていた。

その意味で、長姉の不妊も、次女の失言も、どちらも私にとって重要な道標になっていた。

とくに次女の失言は、彼女の口を使って聖霊が「道標として」その言葉を吐かせたのかもしれない。何としても私を、迷うことなく「童貞聖母」に合わせるために。

よみがえる記憶

それが運命である証拠なのだろう。

産婦人科において、次女がリカの安寧を絶対的に守ったとき——そして、それを見た私の中で、母性（女性）の愚かしさが、そのまま美しさと同義になった時のことである。

そのとき急に、私の意識の前面に、押し出されてきたヴィジョンがあった。それまでずっと忘れていたのに、なぜか今になって、その忘却ずみのヴィジョンが、驚くべき鮮やかさで蘇ってきたのだ。

それは他でもない。かつて高校生だった私に与えられた、あの幻視の記憶だった。もっと明確に言えば、幻視の中で出会った少女の記憶だった。

このときから三年前にあたる、往時のことを振り返ってみよう。

——高校生である私は、そのとき、ある少女の幻を見たのである。

それは、自分も死ぬしかない状況にあって、それでも巨人（モアイ）たちの死を見守ろうとする、少女の姿だった。

彼女は涙を流しながらも、その顔に笑みを浮かべていた。それは、とてつもなく寂しそうな笑顔だった。

そうした少女の姿がありありと、ほとんど前触れもなく、鮮明に私の眼前に現れたのだった。

だが、当時の私には、到底この少女の姿を、受け入れることが出来なかった。

当時の私は、理論的な思考形式のなかに閉じこもっていた。そうして理論的でないものを「そんなものは下らない」と蔑視しながら生きていた。

だから少女の幻視を見たこの時も、合理性ばかりが肥大した臆病者が、必死になって叫び声を上げた。混乱しながら、心の中で、猛然と叫び声を上げたのだ、

「分からない！」と。

「自分の死を覚悟しながら、それでも巨人たちの死を見守るだって？

馬鹿な、そんな事に何の意味があるというんだ。生きていればこそ、お前は、他人のために尽くすことも出来るだろうに。

それなのに、死んで何になる？ そんなの、ただの自己満足じゃないか。そんなの、ただの自殺じゃないか。

そんな馬鹿らしい死に方をするなんて、女というものは、なんて愚かしい存在なんだ！」

ここまで言うのだから、私は明らかに、幻視した少女を拒絶したのである。換言すれば、彼女に「こっちに来るな」と言っているのである。

そのため高校生の私が編んだ「アトラス」は、主人公である少女が登場しない「アトラス」となった——（第2章からの抄出）

愚かしく美しい物語

かくのごとく、高校生の自分にとっての「女性の愚かしさ」は、単に唾棄すべき、拒否すべき対象に過ぎなかった。受け入れることを拒むべき、鼻持ちならない「異物」でしかなかった。

しかし、次女による「我が子の絶対的守護」を見た今は違う。

いまや私のなかで「女性の愚かしさ」は「女性の美しさ」と同義のものとなっていた。換言すれば、私にとってそれは「受け入れてよいもの」。否、むしろ「受け入れたいと欲するもの」にさえなっていたのである。

こうした高揚した気分にあって、私の中では、ある種の使命感が生まれつつあった。

すなわち「今こそ、その時なのではないか。今こそ「愚かしい女性」を主人公とした「美しい物語」を書くべきときなのではないか」と。

もちろん、それによって、具体的に何が起こるかを想定できた訳ではない。

しかし、それをする事によって、今はまだ臍気にしか感じられない「何か大切なこと」が、もっとずっと確固たるものとなって、心のなかで結晶化するのではないか、という予感はずかしくあった。

こういう独特な感覚を、文章で表現するのは難しい。しかしそれは、具体的ではなくとも、抽象的には「確実な予感」だったのである。

いな、「予感」という言葉では、表現として弱すぎるだろう。それは根拠を示せないだけで、私にとっては、むしろ「必然性」に近いものだった。

最優先の義務

こうして、この時期における『アトラス』の執筆は、私にとって、最優先の義務となった。

というのも、かかる『アトラス』こそは、その完成の暁には「愚かしい女性を主人公にした、美しい物語」となるに違いない作品だったからである。

しかし、それは飽くまでも、私の内心においてのみ通用する「義務」であった。その義務を知るものは、ひとり私自身だけだった。

時系列的に言うと、この時期は、鳥居塚先生の死を知ったタイミングと重なっている。そして、その少し後には「卒業制作において、高純度のアルベド侵入を享受する」という場面が控えている。

しかし、そのような「自分の内面から開けてきた、霊的な導き」を、まだ私が完全には消化できていないうちに、いまや「学生生活」が終わりを迎えようとしていた。そしてこの時期から「卒業制作、卒業、就職」という流れが始まることになる。

つまり私のもとに、就職活動に入るべき季節が訪れてきていたのである。

そして、この「自分が働く場所を見つける活動」こそは、客観的、社会的には、専門学

校の生徒である私にとっての「最優先義務」であったことだろう。

第5章 ウル・アトラスの執筆

(1) 引き留められた就職〈十九歳〉

実力と異なる力

誤解を恐れずに言えば、私は、東京デザイナー学院の生徒として優秀だった。トップクラスと言って良かった。

しかし、その力量はどうやら、みな「アルベド侵入的な力」によって、下支えされたものだったらしい。つまり、私自身の実力などは、ほとんど存在していなかったのだ。

たとえば例の卒業制作では、私の作品は、クラスメイトや講師から、多くの賞賛の言葉を集めていた。講師ですら「僕にはこんな絵は描けない」と言っていた。

だが、その作品こそは「私の実力ではない、霊的な助力の純粹結晶」に他ならなかったのだ。それなのに私は、なかば「自分の実力は高いレベルにある」という思い違いをしてしまっていた。

ここには、かなり大きな現状把握の誤認がある。

そして私は、間を置かず、それが誤認であることを、完膚なきまでに思い知らされることになった。まさに、この時期に行われた就職活動における、一連の出来事によって。

霊的存在からの非協力

就職活動における面接や試験などで、私には、幾度も絵を描く機会があった。

ところが、そういった場面に置かれるとである。私には、全くと言っていいほど、自分の思うような絵が描けなくなるのだ。このとき私が感じたのは、

「まるで自分の手から、霊的なヴェールが剥ぎ取られているみたいだ。そして、俺の裸の実力だけが、いま衰れに残されている。しかも、その俺の実力ときたら、どう見たって、低レベルもいいところだ」

という、ほとんど痛みにも似た感覚だった。私は本当に、終始ずっと、(普段だったら、もっと手が動くのに。もっと上手に描けるのに)

と思いつつ、試験用の絵を描いていたのである。

しかし、私には次第に分かってきた。その不調の原因が、決して緊張などではないことが。霊的存在からの非協力。それこそが、不調と力量低下の最大原因であったのだ。

それはまるで、これまでアルベド侵入を与えてくれていた者から「そちら(就職)に行くことは許さない」と言われているかのような感覚だった。

つまり一連の不調が、私には「自分の運命を司る者からの、有無を言わせぬほどの強制力」として感じられたのだった。

そして私は、その巧妙なやり口に「こんなの、逆らいようがない」と臍を噛むしかなかった。

敗者となる決意

こうして私の就職活動は低迷を尽くした。しかし、それによって私は、かえって肝が据わってしまった所がある。

つまり私は、内的にして霊的な義務感に、自分の人生を捧げることを、決意してしまったのである。

かくして私は、半年ばかり、親から「就職をしない期間」をもらった。今で言うところのニートになった訳だ。

となれば、もちろん私は、社会的には敗者だった。親に対しても、顔向けが出来ないほど申し訳がなかった。両親のほうも、当然、息子のこの決断を嘆いていた。

両親ばかりではない。私の、
「就職はせず、これから小説を書くつもりだ」

という言葉に、クラスメイトは、目を丸くして驚いていた。残念がってもいた。彼らは私の絵のほうの優秀性を重々知っていたからである。

しまいには「気が狂ったのか」とまで言われたが、私の決心は、もう寸毫も動かなかった。自分の直観を信じていたからである。

この当時の私には、一方に、鳥居塚先生からの遺産とも言える「高純度のアルベド侵入の体験」があった。そしてもう一方に、姉の出産から得た「女性性との和解の予感」があった。

これらを『アトラス』の執筆によって結晶化させ、最終的に、何らかの「明確な言葉」「明確な概念」「明確な体験」にまで高めること――

それは私にとって、どうしても果たさなければならぬ霊的義務だった。私の心は、確かにそれを直感していた。

義務を果たすこと＝救済

当時、自分の気持ちを、周りの人たちに説明することは到底不可能だった。

しかし、霊的義務を遂行することの「意義の高さ」は、私の心が、完全に認めきってしまっていた。なぜなら、それは義務であると同時に、「自分が救われる予感」でもあったからだ。

実際、当時の私は、救われなくては潰えてしまうほどにも衰弱していた。歪んでいて、

悪くなっていた。そうしたマイナス要因を隠すヴェールもまた、すでに、すべて失われてしまっていた。

つまり、①女性を蔑視することで、自分の矮小さを誤魔化すことも出来ない。②就職に失敗してしまったので、自分のエリート意識を支えることも出来ない。このとき私は、そういう状態にあった。

私の醜さ、卑小さ、罪深さは、いまや剥きだしになって、とめどなく汚い血を流していた。そして、そうした私にとって『アトラス』の執筆だけが、自分の傷を癒してくれる「救済の秘術が眠っている聖地」であるように思えた。

要するに、霊的義務とは、救済の予感でもあったのだ。したがって、義務遂行の「意義の高さ」とは、私の心の「救われたくて仕方ない」という、その必死さとも言い換えられることだったのである。

譬えてみれば、私は「自分の治療法を知っている、精神病患者」のようなものだった。それだから私は、必死にその治療法であるところの『アトラス』の執筆へと、突き進んでいったのである。

しかも結果から言えば、その選択は、たしかに正しいものだった。

本書を執筆している今ならば、こう確言することが出来る。このとき『アトラス』を執筆していなかったら、きっと私は、今ごろ狂人となっていただろう、と。

(2) 執筆の日々 〈二十歳〉

宗教家の非社会性

こうして私の、約半年間の引きこもり生活が始まる。昔の宗教家だったら、山籠もりや、砂漠での隠修士生活に相当している期間だろう。

余談だが、かのイエスにも、自分の霊的覚醒のために、家業の大工仕事（あるいは日雇い労働）をサボタージュしていた時間があったと思われる。

そのときヨセフやマリアは「あいつは仕事もしないで、何をやっているのか」と怒っていたに違いない。

たぶん、宗教的人格には、どうしても不可欠な——必要悪的な——非社会性があるのだ。

そして、この非社会性によって、実際に「大いなる霊的覚醒」を掴んだ者だけが、その人生をのちに、人々から肯定してもらえるのである。

私もまた、その可能性に、自分の人生を賭けた。時間を無駄にはできない。私は決然として『アトラス』を書き始めた。

ヨチヨチ歩きのような執筆

といっても、私はそれまで「まとまった長い文章」など、一度も書いたことがなかった。なにしろ、絵や漫画ばかりを描いてきた身の上である。

だから、何度もつかえ、何度も書き直しをしながら、どうにかこうにか、小説の体裁を取り繕っていった。まさに、赤ちゃんの「ヨチヨチ歩き」のような執筆になるしかなかった。事あるごとに、自分の無能力さが身にしみた。

それでも私は『アトラス』を漫画にはしなかった。それは『アトラス』が、非常に巨大な作品になることが、あらかじめ分かっていたからである。

私にとって「漫画」という語法は、たった1ページを描くのにも、丸一日の作業時間を要するものだった。よって、そんな語法で『アトラス』を描いた日には、その所要時間は、完全に「年単位」を要するものになってしまう。

だったらである。どんなに不慣れな作業であっても、文章表現という語法のほうが、はるかにスピード効率がいいに決まっている。はじめは作業に慣れなくても、人間いつかは慣れるはずだからである。このとき私は、そのように思ったわけだ。

とはいえ、その執筆初期の文章の拙さは、本当に半端なものではなかった。

当時の私が使っていたワープロ（パソコンではない！）には、自動で「更訂回数」がカウントされる機能が付いていた。それによると、小説冒頭の文章などは、なんと十八回も書き直しが為されていたのである。

これには後年、自分でも呆れてしまった。実際それほどにも、文章力がない状態からのスタートだったのである。

ウル・アトラス

しかし、小説の後半部分に関しては「まったく事情が異なる」と言える。

というのもその部分は、後年（三〇歳頃）に完成させた、最終稿としての『アトラス』のそれと、ほとんど変化がなかったからだ。約十年に渡って『アトラス』の推敲は、絶え間なしに続けられたのにである。

つまり二十歳のときの文章が、十年間の推敲期間をへても無変化だったのである。そうなると、この部分の文章は、かなり強力に頑固なものだったと言えるのではないだろうか。

といっても、その無変化は、私が「自身の成長をストップさせたから生じたこと」ではない。

そうではなく、この後半部分に限っては、最初の執筆時に、ハナから文章が「完成」を遂げてしまっていたのだ。だからそれ以降、変化の起こりようがなかったのである。

さもありなん。たしかに二十歳当時の私は、文筆家として卵以前の状態だった。

しかし、小説の後半部分においては、私ではなく、私に乗り移っていた「何者か」が『アトラス』を執筆していたのである。しかも、この「何者か」の文章能力は、私とは雲泥の差をつけて高度なものだった。

つまり、この初稿の『アトラス』の執筆時においては、かの卒業制作と同じ現象が起こっていたのである。

なお「初稿」のことを、ドイツ語で「ウル」と言うので、初稿の『アトラス』のことを、今後は簡単に『ウル・アトラス』と呼びたい。ゲーテの『ウル・ファウスト』と同じように。

自動書記のレベル

もう一度言うが『ウル・アトラス』の執筆時においては、かの卒業制作と同じ現象が起こっていた。

簡単に言えば、それは極めて高純度の「アルベド侵入」である。

それはもはや「自動書記」と言ってもいい。つまりここで起こっているのは「書いているのが、自分であって自分ではない」という、曖昧なレベルの事象では到底ないのだ。

それは「明らかに自分でない者」が、私の手を使って執筆を行っているというレベルなのである。完全に右手が、自律的に、勝手に動いている、と。当事者である私には、そのことが明白に分かるのだ。

卒業制作の時には、ここまでの他人事にはならなかった。それに、あのときは、その「自分でない者」が、鳥居塚先生であるような気がしていた。

しかし、今回の『ウル・アトラス』では、私はまさしく「まるっきりの他人事」を感じていたのである。

しかも、そうであるのにも関わらず、その「他人」を特定することは、絶対に出来ないような気がした。というのも、パーソナリティを持った個人として特定するには、その意識は、あまりにも巨大すぎたのである。

したがって私は、この時、その「他人」を、せいぜい抽象的に「高次の霊的存在」、あるいは「聖霊」とでも、呼ぶしかなかった。

読者として涙を流す

いずれにしても、次のことは言える。私が、ほとんど無我の境地のようになって書いた『ウル・アトラス』——それは無力な小人に与えられた、過大すぎるほどの「神からの賜物」だった、と。

私は創り手でもなければ、与え手でもない。真摯かつ適正に評価するならば、私は『ウル・アトラス』の最初の読者に過ぎなかった。

真の執筆者がいるとしたら、それは、私の心に内在している「見えない霊的存在」に他ならなかった。

真の執筆者が私ではなかった証拠もある。

というのは、物語の後半部分において、ついに「幻視の少女」を描写したさいに、私は、自分の両目から滂沱の涙が流れ出るのを、どうすることも出来なかったからである。

つまり私は、自分で書いたものを読みながら、号泣したのである。

それは私が、物語の「与え手」ではなく、「受け取り手」であったことの、何よりの証拠ではないだろうか。

むしろそうであってほしい。

というのも私は、いくらなんでも自分が「一から十まで自分で拵えた小説を読んで泣く」ほどまでにナルシスティックな人間だとは思えないからだ。

事実、私はそのようなタイプの人間ではないと思う。そうではなく私は、飽くまでも「純粋な読者」として、眼前の物語に、おのれの涙を贈ったのである。

ともあれ執筆開始から約半年後、ついに『ウル・アトラス』が完結する。といても、最終稿としての『アトラス』が完成するのは、まだまだ先の話であるけれども。

ただ物語の骨格については、このとき確かに「アトラス」が完成したのである。

(3) アイデアとしてのシーナ

主人公のモデル

ここで『ウル・アトラス』の主人公について、少し触れておきたい。

彼女が「幻視の少女から派生した存在」であることは言うまでもない。

が、だからといって、一瞬垣間見ただけの少女が、小説の主人公を張れるほどの、生々しい具体性を持ち合わせているはずもなかった。

小説の登場人物というからには、もっと具体的な素性を持ってくれば、作中を生き生きと動いてはくれない。

たしかに手塚さんの文章にも、少女（石像）について「かすかに胸とお尻のふくらみが確認できる」という程度の文言は含まれていた。

それによって私は、彼女がハイティーンではなく、ローティーンであることを規定することができた。彼女がハイティーンならば、さすがに、胸とお尻のふくらみが、かすかということはないだろうからだ。

しかし、それ以上の「少女の具体性」に関しては、どこか他のところから「イメージの援用」を行わなければならない状況だった。つまり私には、誰かしら主人公のモデルが必要だったのである。

こうなると、私にとってその「主人公のモデル」として相応しく思えるのは、かのシーナしかいなかった。

あれだけ直視することを避け、心の中で、逃げ回れるかぎり逃げ回ったシーナではある。

しかし、女性性や母性を受容できるようになったのと同時に、私は「心の中においては」彼女の存在を、率直に受け入れられるようになっていたのだ。むろん、現実のシーナに会えた義理ではないのは、重々分かっているが。

私は久しぶりに、細々としたところまでシーナの姿を思い出そうとした。すると驚くほど鮮やかに、かつての彼女の姿が蘇ってきた。

しかも、そうして蘇ったのは姿形ばかりではなかった。そのとき私の中で、彼女への溢れるような「好き」という気持ちまでもが、鮮やかに再現されたのである。

いや、むしろ私は、ずっとシーナが好きだったのだ。ただその気持ちに、重い蓋を被せていただけなのだ。その蓋を外すことで、いま奔流のような愛情が溢れだしたのである。

十四歳への回帰

しかも、主人公の年齢設定はローティーン。

ならばとあって、私は彼女の年齢を十四歳にしてしまった。十四歳は、あの小さなコンテストが行われた頃の、シーナと同じ年齢である。

それは同時に、私が、どんどんシーナに惹かれていった時期でもあった。もちろん当時は「彼女から離れたい」などとは微塵も思っていなかった。

要するに私は、十四歳のシーナに照準を合わせることによって、何の翳りもない恋の喜びを思い出すことが出来たのである。それはまるで、正午の日差しのような明るさ、春の涼風を受けているような爽やかさだった。

そのような喜びが『ウル・アトラス』を執筆している私のもとにはあった。

問うても意味がないのは分かっているが、それでも自分に問いたくなってしまう。私はどうして、あの時、この喜びから、わざわざ逃げ出してしまったのだろう。

思えば、この『月に待つ女』のストーリーは、一つの「逃亡劇」に他ならなかった。それはシーナという少女を好きになった私が、その好きになった人から逃げ出したために引き起こされた、おそろしく暗い「逃亡劇」だったのだ。

その劇の中で、私は幾人もの人を傷つけ、幾人もの人に助けられた。そして、ときに人に導かれ、ときに霊的な力に導かれた。

そうして、ついに私は、かつて自分が立っていた場所まで、戻ってきたのである。それは言わば「十四歳の自分への回帰」だった。

シーナは、そこで待っていてくれた。むろん、それは現実のシーナではない。しかし、現実の彼女ではないからこそ、そのときシーナは、昔の姿そのままに、微塵の翳りもなく、私の前に立ち現れたのである。

そんなシーナに対して、私は言った。

「本当にごめん。でも、俺と出会ってくれて、本当にありがとう」

第6章 アルベドの悟り

(1) 聖母被昇天〈二一歳〉

聖母マリアに比肩する存在

「シーナへの恋」「幻視の少女」「愚かしいがゆえに美しい母性」「肉身に拠らない母性」。

これらの要素は『ウル・アトラス』の主人公の中で、次第に結びつき重なり合っていった。そうして霊威によって熱せられ、物語のクライマックスにおいて、一つの光となった。

主人公の名前は「チェリア」という。彼女は「処女子（おとめご）の母性」の持ち主として、聖母マリアに比肩する存在である。なにしろ彼女は「聖母被昇天」の教義さえ満たしているのだから。

聖母被昇天とは、聖母マリアが「肉体を持ったまま『受動的に』天界に昇った」という教義である。

そして、そのような出来事が、『ウル・アトラス』の中で、チェリアの身にも起こった。すなわち彼女は、物語のクライマックスにおいて「肉身のまま、上から迫ってくる『天界』に埋没する」のである。それは完全に受動的な昇天だった。

聖母マリアは、ゲーテの『ファウスト』では「栄光の聖母」と呼ばれている。そして栄光の聖母は、迷い果てて原点に戻ったファウストを、その胸に引き寄せ、高みに導く。そのときのファウストは、老いきて、逆に幼児に戻っている。

栄光の聖母が導いた高みにあるのは、神秘主義の真理であり、ファウストはその真理を観ることになる。神秘の合唱がその真理を交響させる。

すべて移ろうものは、
ただの映像に過ぎず。
及びがたきこと、
ここでは実現せられ、
言い難きもの、
ここでは成し遂げられぬ。
永遠にして女性的なるもの、
我らを引きて昇らしむ。

神秘に参入するとき

そして私にも、ファウストと同じことが起こった。

聖母マリアや、栄光の聖母と、同質の主人公を持つ『ウル・アトラス』という小説の完結が、その契機となったのだろう。二一歳の誕生日の前後だったと思うが、私はその時「神秘体験」を味わうことになった。

これはヘルメスの杖で言うところの「アルベド」にあたる悟りだ。

実際『ウル・アトラス』の執筆を通して、私の心はきわめて霊的になっていた。つまり霊的な真理を受け入れるための「心の準備」が出来ていたのだ。

何事であれ、準備が出来ていれば、本番の舞台に臨むことが許される。たとえそれが「真理の受容」であってもだ。私のもとに、その時が来たのであり、言うなればついに「時が満ちた」のである。

神秘体験に恵まれた、往時の自己心理について思い出してみよう。

そのとき、シーナから逃げ出したことを起因とする、あらゆる自分の罪が意識された。

そして、自分という存在について「こんな人間は、いないほうがマシなのではないか」という思いが強まっていった。そうした価値のない自分を思うと、自然と涙が流れてきた。

寂しさや虚しさ、そして涙とともに、まるで自分の心が縮まっていくような思いだった。つまり、自我の矮小化、胎児化が始まっていたわけだ。

このような私に、霊的な母性原理の現れであるアルベドが反応する。というより、アルベドの接近こそが、私の自我矮小化、胎児化を促したのだろう。

救済の場

子は母を求め、母は子を求める。そして触れ合い、抱き合い、溶け合う。

私の胎児化した自我は、アルベドの霊的な子宮に取り込まれる。私はアルベドの羊水に包まれた霊的胎児となる。

こうして「妊婦」という形式によって、私たちは母子一体の「一人」の存在となる。妊婦は「二人でありながら、一人であること」を実現する形式だからである。

そのようにして、私とアルベドは、合わさって一つになった。つまり「合一」したのだった。

いまやアルベドである私の眼前に、無限にして永遠の世界が広がる。それは善と光で満たされた、真昼の白日の世界である。あるいは、翳りのない満月の世界とすべきか。温かさ、優しさ、愛だけしかない世界――

それはまた、寂しさのない世界、虚しさのない世界、そして全てを許しきる慈愛の世界だった。それゆえに、私にとって「救済の場」として機能する世界だった。

そこにおいて私の罪と苦悩は、その何もかもが拭い去られた。霊的母性と一体化しているのだから、当然女性性とも和解している。

また、真理を求めあぐねる気持ちのすべてが、いまや最高の解答を得ることで、静か

に充足されてしまっていた。かつての哲学者の焦燥は、いまや真理の授受によって、完全に癒されたのである。

このようなアルベドへの讃歌ならば、いくらでも書くことが出来るだろう。しかしキリがないので、ここで止めておく。

その詳しい内容について知りたい方は、どうか、第二福音書の「恩寵の原理」と、第三福音書の「アルベド」の項を読んでいただきたい。

アルベドからの帰還

しかし、アルベドの真理は、一瞬にして幕を閉じる。アルベドは、時の流れとは別の時間形式（永遠）で起こる出来事であり、時の流れの継続（時間の長さ）とは無関係のものである。

私は我に返り、このとき自分が、自室の座椅子に座っている事に気が付いた。内面的には驚異の体験をしていたのに、外的に見れば、私はそんなにも無為だったのだ。つまり特別なありかたは、何もしていなかったのである。

だが、それも仕方ない。アルベドの体験は、内向性の極致を示すものだからである。そのぶん外面的な力動性は、限りなくゼロに近づいてしまうのだ。

もっとも、それだけに、体験が終わってもなお、私の内面は「自分のなかで行われた、驚嘆すべき神秘」の強い影響下にあった。自分が味わった体験の、そのあまりの偉大性に震えていた。

いや、それはもはや恐怖に近かった。時の始まりに立って、無限の真理を眺めたことに対し、私は恐怖したのだ。すなわち自分が「人間として超えてはならない一線」を超えてしまったような気がしたのである。

かくして「座椅子に座っている自分」に気づいてから十分もすると、私はやおら立ち上がった。自分の中に「巨大な興奮」と「巨大な恐怖」を閉じ込めておくことが、もはや出来なくなった。

私は部屋から出て行った。そうして両親に向かって「俺は真理を観た」と言った。

神秘主義者となる

そのように興奮して言う私を、父親は相手にもしなかった。

しかしながら、かえって、それで良かったのだろう。もし相手にしていたとすれば、それはいわゆる「気違い」への対応にしか、ならなかっただろうから。

なにしろ、ニートの息子が、部屋に引きこもった挙句に「真理を観た」などと言っているのだ。親がそこに、息子の「発狂」という末路を見るのは、むしろ当然の成り行きであろう。

もっとも、私にしたって「自分が観た真理を、そのとき誰かに説明できたか」と問われれば、それは土台無理な話だったのである。『ヘルメスの杖』でも書いたように「うまく言葉で言い表せない」のが、アルベドの真理の特徴だからだ。

ゲーテも、先の「神秘の合唱」で「言い難きもの、ここでは成し遂げられぬ」と言っているのではないか。

つまり、アルベドの座標で成立していることは、それが誰であっても、当事者が「言うのが難しいこと」「説明するのが難しいこと」なのである。

希少ではないが普遍的な真理

そう、それは本当に「誰であっても」のことなのだ。そしてこの言葉は当然、該当者が複数いることを前提としている。この観点は、非常に重要である。

私は初め「自分が、世界で唯一の真理体得者である」というような気持ちになった。つまり、自分一人だけが、アルベドの真理を知ったのだと思ったわけだ。

しかし、その後ゲーテを含む、多くの神秘主義者たちの、著作や告白に触れた。それはすなわち、プロティノスやアウグスティヌス、クザーヌスやラーマクリシュナなどの文言である。

そして、それによって実際には、世界の至るところに「私と同様の体験をした人たち」がいることを知ったのだった。

彼らの著作や告白には、実際にアルベドを体験しなければ理解できない言葉が、断片的にはあっても、あまたと記されていた。

要するに私もまた、これまで数多く存在した神秘主義者たちの「ワンオブゼム」になったのである。その点で、真理体得者としての希少価値は、大いに下がったかもしれない。

しかし希少でなくとも、こうは言えるだろう。私はこのとき「まことに広い普遍性を持った、まことに高い価値をもつ真理」に触れあったのだと。

(2) 月に待つ女とは誰か

偉大なる母性原理

ところで、この本書の第一部は「月に待つ女」という表題である。

では、その「月に待つ女」とは、いったい誰のことなのだろう。

散発的には、すでに作中で語られ、答えられているかもしれない。が、ここで一度、それらをまとめて整理しておこうと思う。

してみると、「月に待つ女」とは、第一に、神秘体験によって露わになった、偉大なる母性原理、女性原理であると言えるだろう。錬金術において、この女性原理は「アルベド」と呼ばれている。

そしてアルベドは、その女性的性質を表すものとして「銀」や「水」、そして何よりも「月」というシンボルを持っている。したがって、ここで「女」と「月」とが巡り合うわけだ。だから、さしあたって彼女を「月の女性」と呼んでもいいかもしれない。

そしてさらに、アルベドが持っている「永遠」という特性が、彼女の「待つ」という姿勢を、無際限のものにする。永遠を把持している「月の女性」は、決して挫折することなく、彼女の待ち人を「永遠に」待ち続けるのである。

この「月の女性」の待ち人とは、本書においては、もちろん私のことを指している。彼女は永遠に変わることなく、ある種のイデア（理念）として、ずっと、私との合一を待っていてくれたのである。

聖母マリア

第二に「月に待つ女」とは、聖母マリアのことである。

まずマリアは、アルベドの人格的象徴そのものである。「肉身に抛らない母性」「聖霊によって孕まされた処女子」といえば、西欧においては、疑問の余地なくマリアのことを指すからだ。

彼女がアルベドの象徴であることは、第三福音書でも述べてある。

歴史的に見ても、マリアが「月の女性」であることは明瞭である。というより、マリアは歴史の中で、しだいに月の女神の属性を、その身に付けていった女性なのである。

異なる神や宗教が合一されることを「習合」と言う。マリアは、その習合によって「月の女性」あるいは「月の女神」となっていた。

代表的なものとしては、まず、エジプトにおける月の女神である「イシス」との習合が挙げられるだろう。息子ホルスを抱いているイシスの姿は、そのまま、イエスを抱いているマリアの姿へと置き換えられている。

そして、次にマリアは、ギリシアにおける月の女神である「アルテミス」と習合した。なんといっても、マリアが晩年を過ごしたというエフェソスは、元来アルテミス信仰が盛んな土地だったのである。それゆえマリアとアルテミスの習合は、しごく当然の成り行きだったのである。

とはいえ、このような習合現象が起こったのは、もともとマリアが、イシスやアルテミスと同様の「月の女神としての素地」を内在させていたのが真因である。

そして、それは結局マリアが、アルベドの人格的象徴であること。そのアルベドが月というシンボルを持っている、という事情に帰着するのである。

再会したシーナ

第三に「月に待つ女」とは、シーナのことである。

言うまでもなく彼女は、私が十四歳のときに出会い、初恋をし、一五歳のときに、その前から逃げ出さざるを得なかった女性である。

そして彼女に、心の中で再会するためには、私には、どうしても「母性の美しさ」に出会う必要があった。というのも、その「母性の美しさ」だけが、私のなかの女性恐怖、女性蔑視という「シーナとの隔壁」を壊す力を持っていたからである。

幸いなことに私は、出産前後の姉を介して、実際にこの「母性の美しさ」に出会うことが出来た。

そして、このとき生まれた「母性礼賛の気持ち」が、今度はチェリア（『ウル・アトラス』の主人公）を介して、シーナにも投影されることになった。

そのため、私が心の中で再会したシーナは、十四歳の処女でありながら、かつ母性を併せ持つ存在となった。

それは実在のシーナとは関わりない存在であるが、理念としてのシーナは、私の中で、そのような「聖母」にならざるを得なかったのである。

ちなみに一説によると、マリアがイエスを孕んだのは、十四歳の時だと言われる。よって、この点でも、シーナと聖母との親和性が見られる。

そして、聖母マリアが月の女神で、アルベドの母性原理が、月によって象徴させられるのであればだ。

それらの性質と軌を一にするシーナ、私が再会した「理念としてのシーナ」を、どうして「月の高みで、私を待っていてくれた女性」と呼んでいけない法があるだろうか。

第7章 さすらいと火の柱

(1) 母性の崇拜者

大きな変化

アルペドを体験したことによって、私の人格は、根本から作り変えられてしまった。何より大きな変化は、かつては女性蔑視者だった私が、すっかり「母性と女性性」の崇拜者になったということだろう。

しかし、これは当然のことでもある。なにしろアルペドは、霊的な女性原理の現れに他ならないのだから。それに合一したならば、その者は、女性原理の、強い影響のもとに置かれざるを得ないのだ。

たとえば、ゲーテが自身の作品で描いたファウストは、そのラストシーンで「マリア崇拜の博士」と名前を変える。またゲーテ自身も「大地母神の祭祀」と呼ばれたことがある。

となれば、聖なる母性の崇拜者となることは、神秘体験者（アルペディアン）の、避けては通れない宿命なのだろう。

ただし、いくら「聖なる母性」「霊的な母性」が尊崇されるべきだと言っても、それを「肉体的な母性」と、完全に切り離して扱うのは考えものだ。

それをやってしまうと、不可避免的に女性観が片手落ちになって、その本来の十全性が損なわれてしまう。

これには前例もある。中世、近世ヨーロッパにおける女性観がそれだ。そこでは聖母礼賛と魔女狩りが、同時進行で行われていた。つまり、女性観が、霊的母性への賛美と、肉体的母性への蔑視とに、分断してしまっていたのだ。

そこでは明らかに、十全で本来の女性観が、著しく損なわれてしまっている。

肉体的母性の大切さ

私は、本能的にその危険性を嗅ぎ取っていた。「聖なるもの、霊的なものに偏向してはいけない。俗で肉体的なものも大切にしなければならない。それが女性的なものであるならば、高きも低きも、その全てが大切である」

そのように、直観的に、問題の本質を理解していたのである。

そもそも私の場合は、霊的な母性に出会った最初のきっかけが「姉の妊娠出産」という、きわめて肉体的なものだった。だから考えてみれば、私が肉体的母性の大切さを忘れることなど、絶対にあり得ないのである。

現在の視座から見ても、肉体的母性は、霊的母性の雛形として、高い価値を持っているのは明らかだ。

つまり座標1である「混在的一者」は、座標9の「アルベド」と、上下のシンメトリー構図を描いている。どちらが欠けても「ヘルメスの杖」の形状は成立しない。

したがって「聖なる母性の崇拜者」となった、私の信仰対象は「霊的でもあり、肉体的でもある、母性と女性性」となったのだった。

それにしても、かつての女性恐怖症患者、かつての女性蔑視者が、ずいぶんキツパリと宗旨替えを果たしたものである。これではまるで、もともとの住所から、地球の反対側へと引っ越しをしたようなものだ。

これには我ながら、まったくもって驚き呆れるしかない。

(2) 創造の病〈二二歳〉

漫画のアシスタント

つぎに仕事の話をしておきたい。

『ウル・アトラス』が完結し、親に甘えて獲得した「仕事をしない半年間」も終わった。そのため私は「その半年が過ぎたら働く」という約束を、履行せざるを得なくなった。

そこで私は、漫画家のアシスタントを始めた。

しかしながら、それは「自分がやれそうな仕事」ではあっても、決して「自分がやりたい仕事」ではなかった。いや、霊的世界とつながっている人間としては、むしろ「霊的義務を阻害する仕事」ですらあった。

アシスタント時代の私は、実家を離れて、遙かな遠方の地に住んでいた。そこでアパート住まいの、一人暮らしをしていたのである。

そして、まだまだ未熟でアシスタント業務に慣れない私は、研修の意味で、アパートでも絵の練習をしていた。

それは職場の課題として与えられた義務であり、来る日も来る日も、私は職務中も帰宅後も、機械的に絵を描くしかなかったのである。

しかし私には、これが、どうしようもない苦痛だった。なぜなら私は『ウル・アトラス』の推敲をこそ、自分にとっての「最優先の仕事」だと考えていたからだ。

「早く原稿を“初稿”ではない、本物の『アトラス』にしなくてはならない」

と、私はそのように思っていた。何よりも、そのための時間が欲しかった。

しかし、家でも絵を描かなければならないとなると、執筆時間の捻出は不可能である。私はじりじりして、ある種の鬱状態になっていった。

創造の病

実のところ、深層心理（霊的世界）から「これをやりなさい」と業務を命じられている人間は、この世に一定数、たしかに存在するのである。

そして、その使命を果たさないとき、彼は精神病のようになる。要するに深層意識から、ある種の罰を受けるのである。

それは、いわゆる「創造の病」であるが、当時の私が、まさにそうだった。

作者が創作活動を勝手に諦めたりすると、たちまち命令を下すかのように〔深層心理が〕督促を始めるのです。あるいは創作が作家の意志によらず中断を余儀なくされると、もろに重い心の病気に罹ったりします。

ユング『創造する無意識』

松代洋一訳より

イエスは「神は霊である」と喝破しているが、私にとっても「霊的世界」とは「神」と同等だった。私に罰を与える者があるとすれば、それは「神」だった。

したがって、その罰は「神罰」だった。そう思うと私は、どうしようもなく気持ちが重くなった。

結局、沈鬱な表情でもって私は、漫画家の先生に辞意を伝えた。

「申し訳ありません。私には、どうしてもやらなくてはならない事があるんです」

まったく面目ない場面であるが、そのさい先生に『ウル・アトラス』を見せた。読んでくれた先生が「かなり面白かった」と評価してくださった。それが私にとっての、唯一の救いだった。

食うためのアルバイト

漫画のアシスタントの仕事を辞した訳だが、とはいえ二十歳を過ぎた成年男子が、働かない訳にもいくまい。

しかし私の場合、創作以外の仕事にのめり込むことによって、深層心理（霊的世界＝神）への忠節を疎かにすることには、何としても抵抗があった。

それどころか、私にとってそれは「決して、してはならないこと」のようにすら思えた。

そこで私が採択したのは「一般的な仕事によって、社会的責任を果たすこと」を、最低ラインまで制限することだった。それによって、出来得るかぎり「自分が自由にできる時間」を確保しようとしたのである。

いや、それとて正確には「自分が自由にできる時間」などではない。それは真実には「神に従うことが出来る時間」「神への忠節を表せる時間」に他ならなかった。

その大切な時間を確保するため、私は「自分に課せられ、一般的に『仕事』と呼ばれている営為」を、完全に「食うためのアルバイト」と割り切って勤めることにした。

であれば、仕事を選ぶさいには、あまり心労のかからない、軽い内容のものを選んだほうがいい。そうすれば「本業」に、十分な余力を残すことが出来る。たとえ社会的には、高い評価が貰えなくなっても、だ。

実際、私は、それによって他人にどう思われてもよいと思った。精神病になるよりは、余程マシだからである。もはや正業を持たなくともよいとも思った。アルバイトに徹して「フリーター」と呼ばれてもよいとも思った。

しかし、そこまで割り切っても、不安が完全に払拭されることはなかった。すなわち「そうしたアルバイトに『やりがい』を見出してしまったらどうしよう」とまで考えたからである。それはやはり、神への忠誠の揺らぎになるのではないかと。

結局、当時の私は「私の天職は『神とのつながりを保つこと』しかない」と認識していたのである。その認識が、少しでも揺らぐことが、怖かったのである。

火の柱が立つ

それはさておき、遡って読者に伝えておきたいことがある。

それは、私が漫画家のアシスタントを辞めることを、最初に考えたときのことだ。私はそのとき、自分の背中に「炎が燃え上がるような、熱と光」が走るのを感じた。驚いて、思わず「うっ」という声を上げてしまったほどだ。

それが霊的なサインであることは明白だった。そして、それが「そうしなさい」という「肯定のメッセージ」であることも、私には明白だった。

それゆえ私は、このときの霊的体験を「火の柱」と呼びたいと思っている。というのも、旧約聖書の『出エジプト記』に、次のような場面が記されているからだ。状況としては、モーセ率いるイスラエルの民が、エジプトからの追手を“まこう”としているあたりである。

主（神）は彼ら〔イスラエルの民〕に先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。

つまり私は、自分の背に感じた「火の柱」に、神の導きを見たのである。もちろん当時、誰にそんな事を言っても、信じてもらえないことは分かっていた。だから誰にも話さなかったし、正直、この章を書くときまで「火の柱」のことを忘れてしまっていた。

しかし、本章につづく、第二部「太陽を着た女」を読んでもらえれば、読者にはこの「火の柱」のことを信じてもらえるのではないだろうか。そこには、明らかに「神による計画的意図」が見て取れるからである。

再臨のキリストによる福音書 4・1

著 正道

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
